

論文の内容の要旨

論文題名：文明・キリスト教・独立 - 尹致昊における「開化」の模索

氏名：ユーブルラン

本稿の目的は、19世紀後半の開化期に於ける「〈文明〉の受容者側を中心とした〈キリスト教的文明化〉の発想」の解明である。そのために1886年から1906年まで書かれた尹致昊^{ユンチホ}『日記』の前期を主な分析の対象とする。

ここで問題になるのが、現在とは全く異なる理解に基づいていたキリスト教と文明との絡み合わせである。またその上に、今度は両者とも外から伝わったものとして、元々の発信者側に於けるその意味合いと、それを受け入れた受信者側の理解とのズレの問題が重なる。したがって本課題を解明するには、当時に於ける〈文明〉やキリスト教の含意を分析し、それを踏まえつつ、両者を昨今の生存の危機を打開するための唯一の道として位置付けた、受容する側の構想を理解する必要がある。尹致昊、そして彼の『日記』はそのための手掛かりである。

そこで本稿では、先ず尹致昊に於ける〈文明(論)〉とキリスト教のそれぞれの定着や、その結合による〈キリスト教的文明化〉の形成過程を追跡した。彼の関心は理論的探求より目前の危機を如何にして解決するかに重点が置かれており、故にその考察も現状に於ける病弊を探り出すこと、その解決のための手段を模索することに傾いていた。そしてこの時彼が着目したのが、当時帝国主義の拡大と共に欧米全般に亘って多大な影響を及ぼしていた、一種の男性的エネルギー論とも言うべき「気力」論であった。尹致昊はこの議論を積極的に活用し、一方では彼が病根として指目した儒学に対する批判を、同時に他方ではその克服の方案としてキリスト教—文明(論)の分析を行いながら、その上に自らの文明化の企画を構築していた。

このような文明(化)観が形成・定立されたのは、10年にも及ぶ彼の亡命—留学の時期であり、それはちょうど甲申政変(1884)から日清戦争(1894)までの、すなわち清によって朝鮮の主権が脅威にさらされた時期と一致する。その時、事実上の亡命客として先鋭化された彼の意識は、当時の圧倒的な西洋体験によってさらに急進化し、結局のところ、彼に於ける清と日本、朝鮮と欧米との極端的な対比を生み出す主な原因となった。

これを背景に、帰国したばかりの彼の目の前で広げられた、今度は日本とロシアとの角逐によって各政党が目まぐるしく浮沈する混乱状態の政局は、朝鮮に対する彼の認識を悲観的にさせるに十分であった。そこで以上の模索から実際の適用へ、そしてその推進の主体を探していた彼は、期待を寄せた朝鮮国内の各勢力に次々と失望を覚えた時、自力で文明化する力量がないなら、代わりにそれをしてくれる文明国の何れかに自らを「委託」するという(思想的)極端に流れてしまう。

その過程で彼からは二つの特徴的な傾向性、すなわち<無理>と「寧不若」が現れる。例の儒学批判で端的に表れるように、彼は思弁的探求を非難し、実践を強調していた。だが問題は、彼にとって<文明>は、そして特にキリスト教は絶対的な規準として位置付けられていたことである。そうである以上、現状の問題に対する方案は、中でも文明化は正しいものでなければならない。ところが、彼は長い外国経験から、文明化の大義に於ける理念と現実との乖離を十分に熟知していた。では、以上のように理論的な分析への道を自ら閉ざそうとしていた彼は、この矛盾を如何に克服し、どのように文明化を進めようとしたのだろうか。

そこで、当時を直ちに対処せねばならない緊急の状態だと判断していた彼は、矛盾の解決ではなく、既にある選択肢のそれぞれから期待できる効用の<計算>に入ってしまう。当然のことにその間で生じる絶え間ない疑問に彼は非常に苦しんでいたが、このような<計算>との路線では事実上その解決は望めなかったため、終に彼は疑い自体の放棄にまで至る。「寧不若」とは、その問題点を承知しつつも敢えて選択しようとした時、その<無理>を正当化するための論法に他ならなかった。

そして「独立新聞」や独立協会活動を通じた一生一大の改革への挑戦が失敗に終わり、失脚して事実上地方に流された時、今度は彼の企画の根幹である<キリスト教的文明化>そのものを激震させる事件を経験する。それが義和団の乱から触発された「北京略奪事件」である。勿論略奪という行為自体も問題になったが、それ以上に文明国が、しかも正しさの象徴ともいべき宣教師(団体)が自らの蛮行を擁護する過程で<文明>に反する議論を公然と強弁した点で衝撃を倍加させた。そして、この類の主張は当時急速に発達していた通信ネットワークを通じて文明世界の各地に波及され、終には<キリスト教的文明化>の意義そのものをめぐる論争を巻き起こした。

言うまでもなくこのような「宣教師の略奪」は、19世紀後半以降激化一路の「宣教師問題」に悩みつつあった東アジアのキリスト教—文明論者一般に、中でも前述の通りの矛盾に陥っていた尹致昊にとって、これまでの路線に深刻な疑問を抱かせる問題であった。ではここで、果たして<文明>、文明、そして文明化とは、受容する側にとって如何なるものであっただろうか。弊害を認知したにも関わらず受け入れ、しかも適用に赴く最中、ついに矛盾までを経験した場合は。

興味深いことに尹致昊はこれに答えようとするより、さらなる<無理>を選んだ。それはなぜだったのか？ 一見不合理に見えるこのような歩みは、しかし、当時文明化の発想から想定された、文明と野蛮、そして半開までを包括する世界の「学校」化の中で、あくまで真の生徒でなろうとし、そして生徒としてあり続けようとした彼にしてはむしろ自然な選択であった。これを理解するには、今までの思想的伝播に於ける内容の理解中心の観点とは全く異なる、適用と実践からの新しい観点を必要とする。そこで本稿は、文明論者であり、それ以上に文明化論者であった尹致昊という人物の分析を

通じて、〈文明〉の受容する側を中心とした新しい「開化」の思想史を試みる。